<部会研究>

児童文化財の研究

<部会長> 研究第8部 森脇 要

<部会員> 研究第8部 星美智子

湯川礼子

研究第5部 住吉玲子

恩賜財団母子愛育会福祉部長 松原慶二

厚生省児童家庭局育成課専門官 高城義太郎

厚生省児童家庭局育成課主査 渡辺八重

十文児女子短期大学教授 中山茂

日本図書館協会理事 小河内芳子

児童劇作家 落合聡三郎

本部会の研究課題は，児童福祉と対応させて児童文化財をとらえ，総合的に研究することを目的とする。

今年度は，つぎの二部門にわけて研究をすすめた。

1. 1977年度児童文化財研究文献の総合化と体系的解析
2. 児童の観劇反応に関する研究

これらの研究は，朝日生命厚生事業団の研究助成金の補助を得ておこなわれたことを記し，ここに深く感謝します。

1) 1977年度児童文化財研究文献の総合化と体系的分析

分担研究者 中山茂

児童文化財に関する研究文献は，大学や研究所の紀要にかなりあらわれるので，図書や雑誌に見られるものと併せて，体系的に紹介することは，この方面に関心をもつ方々に何らか参考になるであろうと考え，昨年度から実施している。

しかし，これをあまり広い範囲に及ぼすことは，能力に余るので，児童文化財が児童の生活とかかわりあうところに焦点をおいたものに限ることとした。そういっても，やはりあいまいになるのは免れないが，とにかく，児童心理や保育技術の研究という視点に立つものや，児童文学論，作家論，作品論というような，各領域における専門的研究は除き，専門領域でも，児童文化財について基本的理解をたすけると思われる，歴史，現状概観などを内容とするものはとりあげることとした。

研究紀要は，児童文化関係の学科をもつ，大学・短大を対象として選んだ。御好意を謝するとともに，前記のような考え方で，取捨選択したことについてお許しを願いたい。

なお，昨年度は，一般，絵画，音楽・うた，劇・紙芝居・お話，児童図書・児童文化，遊び，テレビの8項目に分けたが，今回は，絵画，玩具，テレビについては該当するものがなかった。

1. 一般

児童文化——森重敏，星美智子，塩川新平著（同文書院，1977）——児童文化の概説書であるが，児童文化の内容を，それぞれ児童の発達段階に対応して分析しているところに特色があり，今後の児童文化理論の研究に多くの示唆を含んでいると思う。

保育文化学——本田和子（日本保育学会編「保育学の進

歩」フレーベル館，1977）――「保育学の進歩」は4部46章からなる論文集で，「保育文化学」はその中の1章である。保育といういとなみを文化という視点からみる研究分野について提言し，児童文化理論研究に関する示唆を含んでいる。

児童文化――安藤美紀夫著（朝倉書店，1977）――児童文化を児童学の研究分野の1部とし，児童文化の研究領域を子どもの遊びの研究と考える立場にたっての児童文化概論で，児童文化理論の展開に示唆を含む。

子どもと児童文化――吉岡たすく著（雷鳥社，1977）――著作選集第3巻で，とくに理論的な文献というわけではないが，いろいろな著作から児童文化の諸領域に関する作品や論文を集め，児童文化研究の根底に家庭生活をおいているところに特色がある。

「児童文化」の内容に関する研究（3）―乳幼児の遊びについて――松原醇子（鳥取女子大学紀要第6巻，1977―10）――「児童文化」を「遊び文化」としてとらえて，家庭生活のなかの子どもの遊びと児童文化財とのかかわりの中に児童文化の理論を追求しようとしている。

2. 音楽・うた

児童のあそびの中のわらべ唄，その2（京都編）――二瓶かう（鶴見大学紀要第14号，1977―3）――京都は他の地方にくらべてわらべ唄が多いが，その中から十数曲をえらんで年代順に紹介して解説し，3曲には楽譜を付している。

解題戦後日本童謡年表――藤田圭雄著（東京書籍，1977）――昭和25年から50年までの31年間の童謡の年表である。作家，作品の紹介にとどまらず，関係の新刊書，雑誌論文なども詳細にとりあげて解説している。巻末に索引があり，事典としての価値もある。

3. 劇・紙芝居・お話

童話の心理学――ベッテルハイムの主張について――波多野完治・乾侑美子（「児童心理」金子書房，1977～7・8）――昔話はいろいろな形で，困難な問題にぶっつかりそれをのりこえることを物語る。このような昔話の価値をみとめ，児童の発達段階に対応して受け入れられるというベッテルハイムの主張を紹介している。

子どもに童話を――吉岡たすく（「子どもと文化」前掲）――童話についての著者の考えをのべ，いい話というのは，児童の心理的発達に対応したものだという観点から好まれる童話の内容から，発達段階を5期に分けて，その関係をのべている。

4. 児童図書・児童文学

幼児期における読書―絵本・童話のもつ意味と読み方・読ませ方――角尾和子（「児童心理」金子書房，1977～12 臨時増刊「幼児教育」）――絵本・童話のもつ意味については，3歳児が絵本とかかわりあった行動の記録を例にとりあげ，また，研究に用いた童話8編を具体的に示している。

絵本の意義と種類――阪本一郎（「乳幼児の教育」創刊号1977―12，財団法人キュックリッヒ記念財団―東京都豊島区目白3～7～4）――絵本の意義として，児童の発達段階に対応する教材としての機能を重視する。したがって，絵本の種類を，(1)機能から見た種類，(2)内容から見た種類，の2つの分類法をとり，前者では，純粋の絵本，物語絵本，挿絵本の3種，後者では，入門絵本から児童詩絵本まで，児童の発達段階に対応した14種類にわける。

絵本の研究――阪本一郎（日本文化科学社，1977）――前項と同じく絵本の意義と種類についてのべているが，大部分は，次の絵本の条件分析に占められている。よい絵本の条件を，物語の文章，絵画，印刷・造本の3点から，さらに6項目について尺度を設定して，細かに分析し，50のよい絵本を具体的にあげて解説している。

子どものマンガ読みの傾向――磯貝芳郎・福富護（東京学芸大学紀要第1部門教育学科第28集，1977―3）――1970年3月第1週発売の週刊マンガ誌及び3月中に発売の月刊マンガ誌併せて21誌について，小学校5・6年生男女332名，大学生男女57名についてアンケート調査した結果の報告である。

現代絵本研究――日本児童文学者協会編（「日本児童文学」別冊，ほるぷ，1977）――編集委員による「絵本とは何か」という座談会記事のほか，「絵本の歴史」では7人の筆者が「その頃の話」を書き，「絵本の方法と可能性」「現代絵本作家編」「絵本と読者たち」「絵本づくり」など6章に多くの人が執筆している。「絵本研究文献集」と「絵本年表」が付いている。

世界の絵本100選――日本児童文学者協会編（「日本児童文学」別冊，ほるぷ，1977）――わが国でほん訳出版された外国の絵本の絵本から100を選んで紹介する。編集委員の座談会記事と世界絵本年表が付いている。

日本の絵本100選――日本児童文学者協会編（「日本児童文学」別冊，ほるぷ，1977）――現在の時点で入手できる日本の絵のすぐれた絵本100冊を選び，その方面の専門の方々が解説を書き，6人の編集委員の座談会の記事と，戦後絵本年表（昭和20年～52年）をおさめている。

絵本教育の実態—広島市保育園の場合——相原和邦（広島女子大学文学部紀要第12号，1977—3）——広島市内の10の保育園における絵本指導はどのように行われているのか，選び方，与え方，読後指導，反省及び課題の4項目にわけて，実地調査の結果をのべている。

子どもの発達段階と絵本——大橋和子（「現代絵本研究」前掲）——それぞれの発達段階にふさわしい絵本はどんなものであろうか，3人の子どもについての経過と，各歳児について選択頻度の高い絵本を調べて，傾向をさぐろうとする。

子どもにとって絵本とは何か——佐々木宏子（「現代絵本研究」，前掲）——「絵本＝遊び」説に何かちがうものを感じる筆者は，絵本を，子どもが遊びやその他の経験から得たものを確かめたり，強めたり，広げたりする手段と考え，繰返しの意義を強調する。

5. 遊　び

幼児期における遊びの指導——磯貝芳郎（「児童心理」金子書房，1977—12臨時増刊「幼児教育」）——変身ごっこの流行から，テレビ番組に出ている変身ものの例をいくつかとりあげ，現代っ子のごっこ遊びを分析する。

乳幼児の表現発達における乳児の歌遊び——角田巌（文教大学紀要第10集，1977—3）——乳児の歌遊びは，乳児の表現発達の当初から人間関係における共有世界の実現をめざしており，養育者の代行が，漸次子ども自身にとりこまれていくものである。

幼児の遊び——斎藤貴子（新潟青陵女子短期大学研究報告 No.7，1977—3）——新潟県下の39の保育所の3～5歳児を対象として，幼児が好んでする遊びを調査し，発達との関係をさぐろうとする。

子どもの遊び—その指導理論——小林芳文著（光生館，1977）——児童文化財の研究ではないが，遊びの指導理論の研究で，遊びが児童の発達に果す役割を，いろいろな角度から解明している。指導の実践，とくに障害児の遊びの指導に及んでいる。

終　り　に

絵本に関する文献が多くなったが，絵本に対する関心のひろがりからみて，当然のことであろう。

絵本については，一種の児童文化財であるということだけではない，絵本を見るのは遊びであるということだけではない，というような考え方が多くなっていることに気がついた。

一方で，児童文化を遊び文化として考えようとする人も多くなっているように思う。

これらを総合して，新しい児童文化体系論も展開されていくことであろう。

なお，上記の文献についてのもうすこし詳しい紹介は，別に刊行される，朝日生命厚生事業団の研究報告書に含まれている。

2）児童の観劇反応に関する研究（2）

分担研究者　星　美智子
湯川礼子

Ⅰ 研究目的

本研究は，児童の文化財受容に関する基礎的研究のひとつとしておこなわれたものであり，観劇における児童の臨場反応を中心に分析して，児童の興味と理解，および演劇の表現と受容の特性をさぐるとともに，さらに児童劇の与え方について検討することを目的とする。

昨年度は，日生劇場の昨年度公演「冒険者たち——ガンバとその仲間——」の観劇反応を調査した。そこでは研究の一部として観劇の特性である「他の観客と一緒にみること」をとりあげ，隣席の子との反応の一致度を検討し，隣席同志の相関が高い結果をえた。今年度は，舞台と客席の距離による反応差から劇場の広さの問題をみることを試みた。

Ⅱ 方　法

1）対　象

東京都の小学6年生，臨場反応観察対象男50名，女50名，計100名。他に感想文分析男50名，女50名，計100名

2）材　料

子どものためのミュージカル・プレイ「ふたりのロッテ」（日生名作劇場公演，劇団四季出演）。

<原作>　エーリヒ・ケストナー，<訳・高橋健二，<脚色>矢代静一，<演出>宮島春彦，（Ⅱ幕13場，上演時間2時間10分）。

≪登場人物≫

ロッテ ｝双生児	ムテジウス（校長）
ルイーゼ ｝双生児	ウルリーケ（先生）
バルフィー氏（父）	ゲルダ　（〃）
ケルナー夫人（母）	アイベルダウアー（写真屋）
イレーネ（父の婚約者）	医師
ベルナウ（編集長）	小間使い　他

≪梗概≫

父のいないロッテと母のいないルイーゼが，夏休みの林間学校ではじめて出合う。ふたりは双生児であり，両親の離婚のため別居していたことを知る。お互いに身替り作戦をとったり，ふたり協力しながら家族4人が一緒に住むことを成功させる。

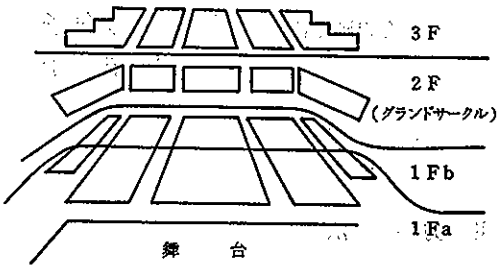
≪材料の選択≫

昨年度と同じく，実験条件をそなえている本公演を対象とした（昨年度紀要参照）。

3）手続き

(1) 観劇中の児童の臨場反応を観察記録する。あらかざめ台本を30シークエンスに割り，主なセリフや舞台の動きを記入した記録用紙を用意する。一方，子どもの行動を類型別に記号化し，観劇中の子どもの行動を舞台の進行と対応させながらマークあるいは記述していく。観察者は被験児から気付かれずによく観察できる位置で2名づつ観察する。以上昨年度とほぼ同じであるが，今年度は同時的に観察する2名は必ずしも隣席とは限らない。また，舞台と客席の距離を第1図のように客席を4分し，各区分人数が偏らないように観察する。

第1図　観客席区分



(2) 終演直後，観察者は被験児それぞれに，面接調査をおこなう。

(3) 劇場に寄せられた感想文2,995通から無作為に男子50名，女子50名分を抽出し，観劇反応を分析する。

4）観察日時

日生名作劇場東京公演日。1977年6月9日～27日。

5）観察者は昨年度と同じ条件をもつもの7名。各公演につき2～4名で観察し，観察者はのべ50名となる。

Ⅲ 結　　果

1）臨場反応

(1) 各シークエンスの反応

昨年度とおなじように，記録された被験児の反応を各記号に整理し，舞台の動きやセリフに対応させて男女別，客席別（第1図参照）に集計する。これを各シークエンスごとに男女計の頻数を求め，反応の多い行動3位までを列挙したのが第1表である（記号は第2表参照）。第1位をみると，全シークエンス30のうち，≪じっと緊張してみている≫が21を占め，残りの1位は≪拍手≫≪プログラムをみる≫≪一緒にうたう≫≪笑う≫であり，いずれも観劇にのっている行動といえる。つまり，殆んどの子どもが集中して舞台をみている。第2位，第3位に多くみられる行動は≪無意識の手いたづら≫≪身うごき≫≪舞台に関連したおしゃべり≫などであり，とくに否定的行動はなく，全般に観劇にのっている行動である。各シークエンスの第1～3位の行動でみる限り，男子と女子のちがいはみられなかった。

(2) 行動類型別の反応差

つぎに，子どものそれぞれの行動がどのような場面に多くみられるかを検討した。第2表が，各行動別にもっとも多いシークエンスをとりだしたものである。シークエンスごとにまとめられた反応数は，それなりに演劇の流れの中での子どもの受け内容の分析として意味がある。しかし，個々の動作やセリフに対する反応も，子どもの劇への興味や理解の分析に欠くことはできない。したがって，両者をつきあわせながら検討することとする。つまり，ある行動が，どのようなシークエス，およびセリフや動作などに多くみられるかをみていく。なお，各個々のセリフや動作の反応結果の表は，詳細にすぎ，大量にわたるため，紙面の都合で省略する。

≪拍手≫　当然ではあるが，第Ⅰ幕，第Ⅱ幕の開幕，閉幕，フィナーレに集中している。劇の途中で≪拍手≫するものは1名もいなかった。

≪緊張≫　じっと緊張してみている行動は，さきのシークエンスごとの分析でもみたようにもっとも多くみられるものである。とくに，≪緊張≫がつよいのは，⑯ロッテの悪夢の場面であり，暗い中で魔女やお化けのお菓子たちの出現，父母の争い，二人がひきさかれるところであり，また，⑩二人が身替り作戦を練る場面である。

≪期待≫　のり出したり，のび上ったりする行動を≪期待≫と分類したが，場面としては，≪緊張≫とおなじ⑯のシークエンスがもっとも多い。粗表からみると，②で舞台の両袖から俳優たちが歌いながら全員登場して

第1表　シークエンスによる反応順位

	場面		第1位	第2位	第3位
〔プロローグ〕	①地図の説明 （子供の家のムテジウス校長と先生2名が地図を持って登場し，ウィーンとミュンヘンを説明する）	男	拍 51	○ 19	↑ 16
		女	拍 61	○ 36	P 16
		計	拍 112	○ 45	↑ 27
	②幕をあける歌 （校長たちの歌唱指導があり全員でうたう。開幕）	男	P 63	♪ 60	○ 55
		女	♪ 80	P 75	～ 57
		計	♪ 140	P 138	～ 111
〔第Ⅰ幕〕 <一場> ルイーゼとロッテの出会い，そして反発	③子供の家の庭 （庭ではウィーンの生徒たちが楽しげにあそんでいる。集合におくれたルイーゼ登場）	男	○ 58	□ 56	▨ 29
		女	□ 77	⊙ 58	⧺ 23
		計	⊡ 133	○ 116	▨ 45
	④出あい・反発 （青空の歌でミュンヘンの生徒たちを迎える。その中のルイーゼと瓜二つのロッテに一同驚き，互いに反発する）	男	○ 57	P 53	T 37
		女	P 81	○ 59	⧺ 36
		計	P 134	⊙ 116	T 68
<二場> ルイーゼとロッテの和解	⑤二人の和解 （夜，ロッテとルイーゼは宿命の一室で互いにロッテは母子，ルイーゼは父子の家庭であることを話し，親近感から和解する）	男	⊙ 53	▨ 39	□ 29
		女	□ 46	○ 45	▨ 23
		計	⊙ 98	⊡ 75	▨ 62
<三場> 二人はお互い双生児だということを発見する	⑥野原の授業 （庭で理科の授業。写真屋登場し，ロッテとルイーゼの写真を写す）	男	○ 73	□ 68	T 63
		女	□ 64	⊙・■ 51	
		計	⊡ 132	⊙ 124	T 105
	⑦双生児の発見 （ロッテ，ルイーゼの2人は誕生日や出生地から双生児であることがわかりもしもみんな一緒にくらせたら……とうたう）	男	⊙ 33	M 31	T 22
		女	⊙ 48	M 30	T 21
		計	⊙ 81	M 61	T 43
<四場> パルフィー氏とケルナー夫人の生活	⑧パルフィー氏宅 （ルイーゼの父はルイーゼから父の写真を送ってくれとの手紙をよみ，返事をかく）	男	○ 53	□ 28	T 27
		女	○ 58	▨ 34	□ 26
		計	⊙ 111	□ 54	▨ 50
	⑨ケルナー夫人編集室 （母，ロッテからの手紙をよむ）	男	○ 31	T 26	M 25
		女	○ 42	M 22	T 16
		計	⊙ 73	M 47	T 42
<五場> ルイーゼとロッテの身替り作戦，秘密会議	⑩身替り作戦 （2人は互いに身替りになろうとし，作戦をねる。校長は2人を勇気づける）	男	○ 88	T 61	M 58
		女	○ 73	□・T 56	
		計	○ 161	T 117	M 110
<六場> ロッテとルイーゼの別れ	⑪子供の家の別れ （林間学校が終り，ロッテはルイーゼにルイーゼはロッテに変装して誕生日が一緒にできるよう願いつつ別れていく）	男	○・⧺ 52		P 40
		女	○ 62	P 53	⧺ 30
		計	⊙ 114	P 93	⧺ 82

	場面		第1位		第2位		第3位	
<七場> ロッテとルイーゼの新しい生活	⑫ 母とルイーゼ （ミュンヘン駅頭でロッテの身替りになったルイーゼは出迎えの母と対面する）	男	○	47	T	25	＋	19
		女	○	57	＋	26	▨	20
		計	○	104	＋	45	T	43
	⑬ ウィーンのオペラハウス （ルイーゼに化けたロッテは父の指揮する音楽会へいき，新しく母になろうとしているイレーネに会う）	男	○	36	T	30	M	26
		女	○	46	M	26	T	22
		計	○	82	M・T	52		
	⑭ ルイーゼの料理 （ロッテになったルイーゼは一生けんめい料理をつくるが失敗し，母は不審に思う）	男	○	50	□	42	▨	38
		女	□	70	□	47	○	46
		計	□	112	○	96	▨	85
	⑮ ロッテの生活 （ルイーゼになったロッテはオペラハウスにきていた女イレーネのことが不安になり女中のレージに聞く）	男	○	38	T	23	M	20
		女	○	48	M	22	T	15
		計	○	86	M	42	T	38
	⑯ ロッテの悪夢 （ロッテは父母の争いから２人がひきさかれる夢をみる）	男	○	80	㋐	41	M	39
		女	○	93	㋐	58	拍	50
		計	○	173	㋐	99	拍	88
〔第Ⅱ幕〕	⑰ 第Ⅱ幕 （校長登場。みんなで幕をあける歌をうたう）	男	～	26	♪	21	拍	20
		女	♪	36	○	28	～	25
		計	♪	57	～	51	○	46
<一場> ルイーゼの力でパルフィー氏の生活は変る。そしてイレーネとの結婚宣言	⑱ オペラ成功のパーティー （パルフィー氏を囲み乾杯。ルイーゼ<ロッテ>登場。変身ぶりに一同驚く。イレーネ登場，客は退出する）	男	○	50	T	46	M	32
		女	○	60	T	48	＋	28
		計	○	110	T	94	M	45
	⑲ 結婚宣言 （父はイレーネと結婚するとルイーゼに告げる。ルイーゼを納得させようとするが，ルイーゼははげしく反対し「ママ」と叫び去る）	男	○	45	M	40	T	36
		女	○	54	T	43	M	27
		計	○	99	T	79	M	67
<二場> 母はロッテの変貌振りを喜ぶ。一方ルイーゼは母の秘密を探ろうとする	⑳ ポストの前 （舞台右手のポストの前でルイーゼ<ロッテ>は悲しげに「どうしたらいいのルイーゼ」とうたう）	男	○	25	M	18	T	17
		女	○	42	M	17	T	6
		計	○	67	M	35	T	26
<三場> ロッテとルイーゼの苦しみ	㉑ 母とルイーゼ （一方舞台左手では急に変ったロッテ<ルイーゼ>のことで母は先生から注意をうけ帰宅。机上の手紙に気づく）	男	○	52	T	32	M	26
		女	○	50	T	43	M	21
		計	○	102	T	75	M	47
<四場> 二人の替玉作戦発覚する	㉒ 二人の替玉発覚 （右手に心労から発熱したルイーゼ<ロッテ>が倒れている）	男	○	51	M・T	21		
		女	○	47	T	23	M	19
		計	○	98	T	44	M	40

	場面		第1位		第2位		第3位	
	㉓ 編集室 （子どもの家で写した2人の写真が偶然に送られ，母はついに替玉作戦をみぬく。ロッテ（ルイーゼ）登場。わけを話し，「許してママ…」とうたう）	男	○	64	M	42	T	37
		女	○	63	M	42	T	39
		計	○	127	M	84	T	76
	㉔ 父電話をとる （ルイーゼ父に電話し，事情を説明2人は互いに親を説得し，両親を電話で話させる）	男	○	51	M	24	□・▨	23
		女	□	63	○	52	▨	31
		計	○	103	□	76	▨	54
<五場> ルイーゼとケルナー夫人，ウィーンへ	㉕ 母とルイーゼ，ウィーンへ （母とルイーゼは飛行機でウィーンへ。窓外の景色がフィルムで映し出される）	男	○	28	＋	17	□	11
		女	○	36	㋐・＋	15		
		計	○	64	＋	32	□・▨	24
<六場> 和解とフィナーレ	㉖ 4人の出合い （2人の誕生日にバルフィー宅再会。ロッテは母，ルイーゼは父と抱きあう。「もしもみんなと一緒にくらせたら」とうたい，2人は父に抱きつく）	男	○	53	T	30	□	27
		女	○	49	□	37	＋	24
		計	○	102	□	64	T	53
	㉗ 和解 （父母は過去の非を悟り，和解。校長・医師登場し，2人の誕生日を祝い，客たちを呼び一同登場する）	男	○	46	T	23	M	13
		女	○	40	T	23	＋	19
		計	○	86	T	46	＋	30
	㉘ フィーナーレ （全員で2人の誕生日を祝って歌い踊る。閉幕）	男	○	48	拍	36	M	27
		女	○	42	拍	36	□	21
		計	○	90	拍	72	□	41
	㉙ さようならの歌 （校長挨拶し，全員でさようならの歌をうたいながら退場）	男	拍・P	49			～	23
		女	P	53	拍	48	～	29
		計	P	102	拍	97	～	52
	㉚ さよなら （舞台下手にロッテ，ルイーゼ，父母の4人が登場し，さようならと手を振る）	男	拍	35	＋	5	㋐	4
		女	拍	46	○	8	↑	3
		計	拍	81	○	11	＋	7

第2表　各行動の一番多いシークエンス

	シークエンス番号			頻数		
	男	女	計	男	女	計
拍　拍手	①	①	①	51	61	112
○　緊張・じっとみる	⑩	⑯	⑯	88	93	173
◍　期待・身まがえ・のび上る	⑯㉓	⑯	⑯	18	28	46
♪　一緒に歌う	②	②	②	60	80	140
P　プログラムをみる	②	④	②	63	81	138
□　微笑む・楽しげな表情	⑥	③	③	68	77	133
◪　しのび笑い・にやにや	⑤	⑭	⑭	39	47	85
◘　高笑い	⑥	⑥	⑥	32	51	83
⊠　ひやかし笑い・ふざけ笑い	㉗	⑯	⑩⑯㉗	3	3	3
：　泣く・涙ぐむ	㉓㉔	㉘	㉓㉘	4	7	10
≀　恐がる・不安がる	⑯	⑯	⑯	8	21	29
㋮　緊張ゆるみほっとする。のびをする	⑯	⑯	⑯	41	58	99
M　身動き・坐り直す	⑩	⑩	⑩	58	52	110
T　無意識の手いたずら	⑥	⑩	⑩	63	56	117
V　よそみ	⑩	⑩	⑩	36	25	61
△　いたずら・鞄いじりなど	⑩	⑩㉑	⑩	20	6	27
×　おしゃべり・他の子にいたずら	⑩	⑯	⑩	15	7	19
↑　舞台指さす・舞台へ返事	②	②	②	19	19	38
↓　やじる	⑯	⑩	⑯	2	1	2
◎　ひとりごと・セリフまねる	③	⑩	③	9	8	14
◎　舞台の動作まねる	②⑦⑩⑯	㉔	⑯㉔	1	3	3
～　リズムにのる・手拍子	②	②	②	54	57	111
‖　他の子と顔見合わす	⑥	⑥	⑥	20	19	39
＃　内容について話す	②	②	②	31	52	83
λ　体をよせあう・よりかかる	⑪	⑥	⑪	20	29	41
⊘　話しかけられ無視	⑥⑪⑫	⑦③⑩	⑧⑪⑫	2	2	3
☆　天井・ライトみる	②	⑫	②	13	10	18
∞　オペラグラスでみる	⑱	⑰⑲	⑱	5	2	6
⊖　退屈そう・眠そう	㉑	⑩⑮	⑩	4	3	5

くる，⑯夢の中で，父が母に「出て行け！」とどなる所と，㉓母が編集室で双生児の写真をみるところに多い。おなじのり出す行動であっても，ひとつは初めて勢ぞろいする役者たちへの関心であり，つぎは恐怖と不安，そして最後は二人並んだ写真をみて母がどう反応するか，二人の計画がばれないかと次につづく展開に対する興味である。

≪歌う≫　舞台からの指導や促しによって「幕をあける歌」「さよならの歌」を歌っている。他には，プログラムに歌詞がのっている「青空の歌」を2回目(④と⑪)のとき，女子2名が歌っているだけである。

≪プログラムをみる≫　プログラムをみるのは，「幕をあける歌」「青空の歌」「さよならの歌」のとき，印刷されている歌詞をみている。「青空の歌」はプログラムをみているのに(④56，⑪43)，歌っていないといえる。他に，ミュージックナンバーになると，歌詞をさがしてプログラムを用いている。キャストをみるためのプログラムをみるものは，数少なく，場面もばらついている。

≪笑う≫　「ほほえみ」「しのび笑い」「高笑い」は，それぞれ頻数の多い個所をみると一致しており，個々人の笑いの表現のちがいとみることができる。≪笑い≫の多い個所をみると，③ルイーゼがさるのまねをする，④二人の顔をみて「瓜二つ，気味悪い」，⑤「ブス」，⑥写真屋がはでに転ぶ，⑩ロッテとルイーゼの入れ替りを確めるため，友だちがルイーゼを蹴とばすところと，ルイーゼが「何するのよ！」と蹴とばし返しばれてしまうところ，⑭ルイーゼがロッテに化けて料理をつくり，自分の作った料理を味わい「ひどい味！」という，㉕フィルムで飛行機が映写される，㉖母とルイーゼ到着，ルイーゼは父，ロッテは母と「パパ！」「ママ！」とそれぞれ抱きあう。以上をみると，③と⑥は動作のこっけいさ，④⑤はことばそのものに笑っており，⑩⑭はユーモアを解しての≪笑い≫である。㉕飛行機のとびたつフィルムでの笑いは，解釈に苦しむが，前のシークエンスで「明日一番の飛行機で発つ」ことになり，いきなり飛行機を映写してそれを表現していることを唐突に思っているのかも知れない。約半数の子が笑っている。㉖の子どもがそれぞれ「パパ！」「ママ！」と抱きつくところは本来まったく笑いと関係ないところである。互いに舞台を交叉することが≪笑い≫をさそうのか，56名と半数以上が笑っている。以上の㉕と㉖は，解決を喜ぶ場面として満足の「ほほえみ」なら理解できるが，「高笑い」する子もあり，笑いの意味がストーリーと無関係であることを明らかにしている。

≪泣く，涙ぐむ≫　㉓母がルイーゼがロッテになりすましているのを見抜き，ルイーゼが「許してママ」と歌う場面，㉘4人が出あい，ロッテとルイーゼが「もしも一緒に暮せたら……」と歌う場面にみられる。

≪恐がる≫　⑯ロッテの悪夢のシークエンスに集中している。父と母の争い，お化けのお菓子たちの踊り，魔女の出現，父がのこぎりでベットを切るなどが，レシタチーブの音楽と妖しい照明の色でさらに恐さが助長される場面である。

≪弛緩≫≪身うごき≫　弛緩と身うごき，は緊張したあとに多くあらわれ，期待，緊張，恐怖，悲しい場面の直後にみられる。⑯悪夢のあと「夢だったんだわ」のセリフ，⑦互いに双生児であることを発見し，そのショックのあとの歌「もしもママと一緒に暮せたら……」，㉓替玉作戦を母にみやぶられ，はじめてルイーゼとして母と話し，ルイーゼが「許してママ……」と歌う場面などである。

≪弛緩≫や≪身うごき≫はこうして緊張の表裏としてあらわれるほかに，退屈，いたずら，おしゃべり，よそみといった場面にもみられる。ひとつは，ミュージックナンバーの⑩「勇気のうた」と④「三人の先生たちのうた」である。低音でゆっくりした調子のうたであり，子どもたちに好まれていないのがわかる。また，⑩校長先生の会話，⑮女中との会話など，おとなの会話の長びくところに，この種の≪弛緩≫≪身うごき≫がみられる。

≪よそみ≫≪いたずら≫≪おしゃべり≫≪やじる≫≪退屈そう≫　これらの観劇への否定的な行動は，シークエンスでいえば⑩がもっとも多くなっている。それらはシークエンス全体ではなく，校長と二人の子の会話と「勇気のうた」の場面に集中している。これは≪弛緩≫≪身うごき≫でもふれたが，会話の長びくというところと子どもに好かれない歌の場面である。

≪顔をみあわす≫≪身体をよせあう≫≪話しあう≫　このような，互いに共感をたしかめあう行動は，⑥の「理科の勉強の歌」にもっとも多い。明るく楽しい歌と踊り，子どもに身近なテーマとユーモアのある歌詞やことばがうけているといえる。楽しい場面に嬉しそうに隣席の子と顔をみあわせたり，身体をよせあうことが多いといえよう。また，開幕のあと，全員が舞台の両袖から出るところもこれらの行動が多くみられ，観劇への期待がうかがえる。

(3)　反応の男女差

第3表は，行動類型別に男女のちがいをみたものである。男女で明らかな差があるのは，つぎのような行動である。女子の方に多いのは≪隣りの子と身体を寄せあう≫≪ひとりごと，動作やセリフをまねる≫≪恐がる・

第3表　行動類型別の反応数

	男		女		計	
	頻数	%	頻数	%	頻数	%
拍　拍手	231	(41.6)	265	(53.4)	476	(100)
○　緊張・じっとみる	1,372	(48.8)	1,439	(51.2)	2,811	(100)
◍　期待・身がまえ・のび上る	209	(49.9)	210	(50.1)	419	(100)
♪　一緒に歌う	89	(39.0)	139	(61.0)	228	(100)
P　プログラムをみる	315	(41.2)	449	(58.8)	764	(100)
□　微笑む・楽しげな表情	445	(42.6)	600	(57.4)	1,045	(100)
◪　しのび笑い・にやにや	305	(46.4)	353	(53.6)	658	(100)
◘　高笑い	118	(39.1)	184	(60.9)	302	(100)
⊠　ひやかし笑い・ふざけ笑い	13	(72.2)	5	(27.8)	18	(100)
:　泣く・涙ぐむ	13	(38.2)	21	(61.8)	34	(100)
≀　恐がる・不安がる	11	(26.2)	31	(73.8)	42	(100)
㊦　緊張ゆるみほっとする・のびをする	292	(53.2)	257	(46.8)	549	(100)
M　身動き・坐り直す	688	(56.2)	537	(43.8)	1,225	(100)
T　無意識の手いたずら	739	(53.7)	637	(46.3)	1,376	(100)
V　よそみ	276	(60.4)	181	(39.6)	457	(100)
△　いたずら・鞄いじりなど	194	(80.5)	47	(19.5)	241	(100)
×　おしゃべり・他の子にいたずら	122	(80.3)	30	(19.7)	152	(100)
↑　舞台指さす・舞台へ返事	56	(44.1)	71	(55.9)	127	(100)
↓　やじる	7	(87.5)	1	(12.5)	8	(100)
◎　ひとりごと・セリフまねる	52	(55.9)	41	(44.1)	93	(100)
◎　舞台の動作まねる	4	(25.0)	12	(75.0)	16	(100)
～　リズムにのる・手拍手	124	(50.0)	124	(50.0)	248	(100)
‖　他の子と顔見合わす	153	(42.4)	208	(57.6)	361	(100)
⧺　内容について話す	385	(40.5)	565	(59.5)	950	(100)
⁂　体をよせあう・よりかかる	172	(33.2)	346	(66.8)	518	(100)
⊘　話しかけられ無視	15	(55.6)	12	(44.4)	27	(100)
☆　天井・ライトみる	95	(65.7)	48	(34.3)	140	(100)
∞　オペラグラスでみる	30	(81.1)	7	(18.9)	37	(100)
⊖　退屈そう・眠そう	20	(69.0)	9	(31.0)	29	(100)

不安がる≫行動である。逆に男子の方が多い行動は≪いたずら≫≪おしゃべり≫≪やじる≫≪退屈，眠そう≫などである。公演内容が主人公が二人の女の子，登場人物も女の子が多く全般に女子向きであるため，男子に否定的な行動が多くみれるといえよう。

(4) 舞台と座席との距離による反応差

舞台と座席の距離が近いか遠いかによって観劇反応がどう異なるかをみることとした。観客席（総数 1,334）を第1図のように，1階席の前と後，2階席，3階席と分け，それぞれの座席でみた子どもたちの反応を比較する。行動類型のうち，劇にのっている集中的行動として≪緊張してじっとみている≫と≪期待して身をのり出す≫行動をとりあげた。一方，劇にのっていない否定的行動として，≪よそみ≫≪いたずら≫≪おしゃべり≫≪退屈・眠そう≫を対象とした。まず，ひとりひとりの子どもの観劇中の集中的行動の総数，否定的行動の総数を算出し，座敷の四区分それぞれについて，平均と標準偏差をもとめた。その結果は第4表に示すものである。

第4表　集中・否定行動

座席位置		1Fa	1Fb	2F	3F
人数		18	20	42	20
集中的行動	平均	29.28	26.90	28.50	28.30
	標準偏差	8.94	6.16	7.17	4.29
否定的行動	平均	7.22	11.10	8.07	8.65
	標準偏差	6.55	12.24	6.52	8.47

第2図

第2図は1階前席を100として，指数で各座席区分の行動を示したものである。このように，観劇にのっている，のっていないの両面から座席の位置によるちがいをみると，集中的行動はわずかのちがいであるが，1階前席がよく，つぎに2階席，3階席，そして1階後席の順になっている。否定的行動の方は，集中的行動とまったく逆の順に多くなっており，否定的行動の各区分はかなりはっきりした違いがみられる。しかしながら，標準偏差が大きく個人差の多いことを示し，統計的処理による差の検定では有意の差まで至っていない。

(5) 観察者間の一致度

観察の信頼度をしらべるために，同一の子どもを同時に観察して，観察者間にどの程度の一致がみられるかをしらべた。3人の観察者がそれぞれ他の二人の観察者ひとりひとりとの組合せで観察する方法をとり，子どもの反応数を100として，合致数を%で算出した。その結果はつぎのようになる。

A：B　67.5%
B：C　70.3%　　M=66.9%
A：C　62.8%

一致をみない行動をしらべると≪身うごき≫と≪弛緩≫および≪ほほえむ≫と≪しのび笑い≫であり，これらの子どもの行動は観察者にとって微妙にうけとめ方のちがうことが明らかであった。この二組の行動，すなわち，「身体を動かすこと」「と高笑いでない笑い」は，さらに，≪身うごき≫と≪弛緩≫，≪ほほえむ≫と≪しのび笑い≫に分けること自体に，無理があるといえる。したがって，それぞれ組合せて二組の行動としてみれば，観察者間の一致度は平均71.0%となり，観察の信頼性はさらに高められる。

2) 面接調査

終演直後に，観察者は自分の観察した児童2名にひとりづつ面接して，感想やその他の質問(計6問)をする。第5表(1)～(6)が子どもの答えを整理した結果である。なお，面接調査は，子どもたちが学校から引率されてきているため，帰途につく団体行動に支障ない程度の時間しかとれず，ごく短時間に限られている。したがって，質問に対して潜時の長い子どものばあいは打切らなければならず，「無答」の数が増えてしまう。子どもの「わからない」という解答も観察者がさらにうながす時間的余裕がないままの数である。

第5表 (1) 感想

	男 N=50	%	女 N=50	%
面白かった・よかった・楽しかった	39	78.0	24	48.0
かわいそうだった	1	2.0	3	6.0
皆一緒になれてよかった	2	4.0	12	24.0
歌・踊りよかった	2	4.0	3	6.0
2人の性格の違いよく出ている，他			3	6.0
おとなの世界にはいろんなことがある			1	2.0
協力すれば何でもできる，他	1	2.0	2	4.0
自分もああいう劇やりたい			1	2.0
長すぎるから短かくした方がいい，他	2	4.0		
わからない・無答	5	10.0	2	4.0

第5表 (2) 一番よかったところ

	男 N=50	%	女 N=50	%
全部よかった	2	4.0	3	6.0
皆が一緒になったところ	19	38.0	14	28.0
最後のお誕生日・フィナーレ	11	22.0	15	30.0
子供の家	5	10.0	5	10.0
歌・踊り	3	6.0	4	8.0
2人が作戦話すところ	1	2.0	2	4.0
ウィーン組とミュンヘン組のやりとり	3	6.0		
熱出したところ	1	2.0	1	2.0
母が写真みてわかったところ			1	2.0
2人がよく似ている，他	1	2.0	1	2.0
夢のところ	1	2.0		
写真屋面白い	1	2.0		
よいところなかった	1	2.0		
わからない・無答	5	10.0	4	8.0

第5表 (3) 誰が好き

	男 N=50	%	女 N=50	%
ロッテとルイーゼ	10	20.0	27	54.0
ロッテ	9	18.0	7	14.0
ルイーゼ	2	4.0	13	26.0
お父さん	1	2.0	2	4.0
お母さん	3	6.0	1	2.0
おじいさん（ペーター）	6	12.0		
写真屋さん	5	10.0		
校長	1	2.0	2	4.0
全員	3	6.0		
好きな人いない	4	8.0		
わからない・無答	7	14.0	2	4.0

第5表 (4) わからなかったところ

	男 N=50	%	女 N=50	%
わからないところはない	42	84.0	44	88.0
2人よく似ていてはじめわからなかった	1	2.0		
父の婚約者どうなったか			3	6.0
お菓子の出た夢のところ	3	6.0		
大きい声なので本当にあの人たちがセリフ言っているのか	1	2.0		
あったけどどこか忘れた	1	2.0		
無　答	2	4.0	3	6.0

第5表 (5) 舞台装置

	男 N=50	%	女 N=50	%
よかった・きれい	30	60.0	26	52.0
フィルムの工夫がよい			3	6.0
パーティのシャンデリア面白い	2	4.0		
ライト・マイクがよい	1	2.0	2	4.0
ウィーンとミュンヘンの対応がよい			4	8.0
台所がすてき			2	4.0
庭の場面がよい			1	2.0
物足りない・あきる	2	4.0		
フィルムも劇にした方がよい			2	4.0
幕がかわるとき人がみえておかしい，他	2	4.0	3	6.0
無答・わからない	13	26.0	9	18.0

第5表 (6) 劇のねらい

	男 N=50	%	女 N=50	%
家族一緒に暮すこと・親子愛	11	22.0	22	44.0
仲よくすること・友情	7	14.0	2	4.0
協　力	3	6.0	5	10.0
思いやり・やさしさ	1	2.0	5	10.0
おとなの世界をしらせる	2	4.0		
悪いことしたら償なう	1	2.0		
思わぬことで失敗が直る	1	2.0		
幸　せ			1	2.0
歌と踊り	1	2.0		
わからない・無答	23	46.0	15	30.0

(1) 「ふたりのロッテ」観劇の感想

子どもたちの殆んどが観劇後「面白かった」「楽しかった」など満足した答えをしている。わづかであるが男子に「長すぎる」などの批判的感想がみられる。なお，女子の方が「皆が一緒になれてよかった」「ふたりの性格がよくでている」など内容にふれた具体的な答えが50％と多く，男子は12％にすぎない。

(2) 一番よかったところ

劇のなかでもっともよかった場面をたずねた。これは「最後に家族4人一緒になれたところ」「皆が揃って誕生日の祝いをするフィナーレ」に集中し，全体の60％を占めている。「林間学校の子どもの家の楽しい場面」「歌と踊り」がよかったというもの，「全部よかった」というもの，あわせて20％強であるが，それぞれ男・女とも似た割合になっている。この他，男子だけに「ミュンヘン組とウィーン組の子どもたちの対立」「写真屋」など，コミカルな場面があげられている。なお「よいところなかった」という答えも男子にみられる。

(3) 登場人物の中で好きな人

登場人物のなかで誰が好きかを質問したが，主人公のロッテとルイーゼがもっとも多い。とくに女子は94％である。男子は42％であり，他の登場人物に分散しているのが特徴的である。男子は自分と同年齢の女の子が主人公であるので，「好き」というのに抵抗があると考えられる。また，ロッテとルイーゼのふたりを好きというものをみると男20％，女54％である。そして，ロッテだけをあげるものは男18％，女14％であり，ルイーゼだけをあげるものは男4％，女が26％である。とくに活潑でおてんばな女の子ルイーゼは男女差が明らかで，女の子には好まれている（男子の6.5倍）が，男子には好かれていない。男子はおとなしいロッテの方を多く好み，ルイーゼの4.5倍になっている。

(4) わからなかったところ

理解できなかった場面をきいたが，「わからないところはない」という答えが殆んどであり，男84％，女88％になっている。とくに興味ぶかいのは，女子だけが「父と母が最後に一緒になるが父と結婚するはずだった女の人がどうなったかわからない」ことをあげている。これは理解できない場面というのではなく，劇に描かれていない領域である。これは逆に劇のはこびをよく理解している子の疑問ということができよう。

(5) 舞台装置について

舞台装置については半分以上が「よかった」「きれいだ」と答え，部分的によかった場面をあげるものを含めると70％になる。10％の子は批判や不満などであるが，フィルム映写の場面や舞台転換のための人物が目ざわりだということで，演劇の約束ごとへの戸まどいがみられる。残り20％が「無答」「わからない」になっている。

(6) 劇のねらいは何だと思うか

「ふたりのロッテ」を観て，子どもが何を感じたかを知るために，「この劇のねらいは何だと思うか」という質問をした。第5表(6)にみるように，「家族の愛情」「協力」「思いやり」などがあげられている。一方「わからない」「無答」も他の質問項目より多くみられ，男子46％，女子30％となっている。これは父母の離婚および双生児の設定が子どもたちの生活とかけ離れているために，自己同一視する人物がいないことによるとも考えられる。また「劇のねらい」というと，何か教訓的なことに結びつけて考えをめぐらしているようにも思われる。学校からの団体観劇の影響もあろう。

3) 感想文からの分析

後日，日生劇場に寄せられた感想文（東京都内各小学校）は2,995通（男1,205名，女1,790名）である。無差別に男50名，女50名の感想文を抽出し，これについて検討を試みた。感想文の内容をみると，大別してつぎの三つにわけられる。すなわち，(1)劇の内容に関した感想，(2)印象に残っている場面，(3)演者に対する賞讃や感動である。この他に，舞台装置についての感想，劇場についての感想，内容や題名についての批判などさまざまの意見や感想もある。これを(4)その他の感想として整理し，感想文の内容を表示したものが第6表(1)～(4)である。

感想文をみると，子どもたちが本格的な劇場での公演に感動していることがうかがえる。生まの演劇に接して，日頃のテレビでは得られないものだといっている子

第6表 感想文からの分析

(1) 内容から受けとめたもの

	男 N＝50	%	女 N＝50	%
皆が一緒になれてよかった	14	28.0	18	36.0
親への愛情に感動	4	8.0	3	6.0
家族愛・姉妹愛	3	6.0	2	4.0
おとなの身勝手への批判	4	8.0	6	12.0
おとなの世界考えさせられた	3	6.0	1	2.0
協力・勇気	2	4.0		
幸せを求める努力必要	2	4.0	1	2.0
自分の家庭の幸せ	3	6.0	10	20.0
計	35	70.0	41	82.0

第6表 (2) 印象に残る場面

	男 N=50	%	女 N=50	%
2人の性格正反対で面白い	6	12.0	4	8.0
入れ替って失敗したのが面白い	3	6.0	5	10.0
フィナーレよかった	1	2.0	3	6.0
2人が初めて仲よくなったとこ			1	2.0
双生児に気づき一緒にくらせたらとうたうとこ	1	2.0	2	4.0
電話のところ	1	2.0	3	6.0
ロッテが病気になったところ			1	2.0
子供の家で一緒にいるとこ			1	2.0
子供の家のお別れのパーティ楽しい			1	2.0
2人よく似ている	4	8.0	6	12.0
計	16	32.0	27	54.0

第6表 (3) 役者に対する賞賛・感動

	男 N=50	%	女 N=50	%
歌・踊り素晴しい	6	12.0	7	14.0
声(発声・よい声など)に感動	7	14.0	7	14.0
演　技	4	8.0	1	2.0
練習の厳しさ			4	8.0
裏方の苦労	1	2.0	2	4.0
計	18	36.0	21	42.0

第6表 (4) その他の感想

	男 N=50	%	女 N=50	%
舞台装置・衣装についての感想	6	12.0	5	10.0
原作・テレビとの比較	7	14.0	4	8.0
内容についての批判	7	14.0	5	10.0
題名についての批判	3	6.0	2	4.0
初め面白くなかったがみているうちに感動	5	10.0		
観劇への興味	7	14.0	8	16.0
原作への興味	1	2.0	3	6.0
劇場についての感想	11	22.0	4	8.0

も多く，観劇一般への興味を深めている。演ずる者たちへの驚きに似た賞賛や感動ものべられている。本公演「ふたりのロッテ」について，子どもたちは，「みんなが一緒に暮せるようになったこと」がよかったと劇の結末を喜んでおり，これに関連して自分の家庭をみつめ，「父母やきょうだいとの現在の生活を幸せだ」と感じている。本公演が子どもたちに家族や家庭のあり方を考える刺激を与えたようである。

舞台から近い1階前席でみた子は，「二人の俳優が似ていないのに，お化粧や演技で双生児のようにしている」のに感心し，3階席の子は「よく似ていて双生児の俳優が演じていると思った」といっている。前列の子は俳優と目があって「ドキドキした」ともいっており，舞台と客席の距離の遠近のちがいがうかがえる。

感想文の詳細な分析は紙幅の都合上省略する。また，昨年度の公演「冒険者たち」の観客調査と今回の「ふたりのロッテ」との比較もおこなったが，前者とともに朝日生命厚生事業団の研究報告書にゆずることとする。

Ⅳ 考　　察

1) 子どもたちは，完備された立派な劇場で本格的なミュージカルを観劇し，演劇への関心をたかめている。日頃のテレビメディアでは得られない感動をえたという子も多い。また，観劇によって原作「ふたりのロッテ」への読書意欲をそそられている。

2) 「ふたりのロッテ」は，両親の離婚がテーマの中心であるだけに，子どもたちは，自分の家庭が両親揃って，きょうだいと一緒に暮している幸せを改めて感じている。「ふたりのロッテ」の観劇は，小学高学年の子どもたちにとって，客観的に自分の家族や家庭のあり方を考えさせる初めての刺激になっているようである。

3) 臨場反応では〝ロッテの悪夢〟の場面に≪緊張≫≪期待≫がもっとも多く，≪恐れ・不安≫も一番多い。この場面はレシタチーブの入る奇妙なオペラ場面であり，無気味な音楽・妖しげな光の中に悪魔も登場する。しかし，面接調査や感想文のなかには，この場面の感銘をあげるものがない。つまり，≪身をのり出す≫など積極的反応が多いからといって，子どもに好まれたり強い影響を与えているとはいえない。すなわち，受け内容の裏づけなしには受け反応の意味を把握できないことが明らかである。

≪緊張≫≪期待≫の多い場面のあと≪弛緩≫≪身うごき≫が多く，両者は表裏の関係にある反応といえる。一方，これとは別に≪弛緩≫≪身うごき≫は，≪退屈≫≪よそみ≫≪おしゃべり≫とも関連が強く，劇にのらないときにも多くみられる。観察の行動類型として≪弛緩≫と≪身うごき≫および≪ほほえみ≫と≪しのび笑い≫は判別しにくいため，同一行動としてもよいと考え

られる。

4) 男女の反応を比較すると，否定的行動が男子に多く，集中度は女子の方が高い。また男子は「つまらなかった」「登場人物に好きな人がいない」というものがいたりして，本公演「ふたりのロッテ」が女子向きであることがうかがえる。

また 男子にはまったくみられなかったが 女子の中には「父の婚約者はその後どうなったか」と疑問をなげかけているものがある。「きれいな人だからまた誰かと結婚できるだろう」というものまでいる。この年齢では男子より女子の成熟度がたかいこともあるが，関心のあり方のちがいともいえる。テレビ番組でも男子がマンガに執着している小学中学年から，女子はホームドラマを好んでいることはすでに調査によって知られている。

なお，双生児のうち，男子はおてんばのルイーゼより，おとなしいロッテを好んでおり，女子の好みと反対であることは興味深い。

5) 「ふたりのロッテ」は，昨年度の「冒険者たち」では皆無であった反応≪退屈≫≪眠そう≫が男女ともにみられ，今年度新たに観察項目に加えなければならなかった。このような反応は会話の長びくところや特定の歌の場面にみられる。この特定の歌は全13曲（開幕・閉幕時の歌を含め）のうち，「勇気の歌」であり，前後２回でてくるが２回とも≪退屈≫などの行動がみられ，子どもたちに好まれていないのがわかる。この曲は，他曲に比べ，踊りの振付けがなく ゆっくり低い声で歌わされる。子どもたちは明るいリズミカルな曲を好むといえる。「冒険者たち」の公演では，音楽や踊りに合わせて子どもたちがリズムをとったり，無意識にリズムにのって身体を動かしていた。今回の「ふたりのロッテ」にそれはみられず，昨年度の方が全般に子どもの好みにあう音楽であったといえよう。

また，「冒険者たち」のばあいは「自分が舞台に助けにいこうとして，ハッと劇だと気づいた」というように登場人物や劇のはこびにのめりこんでいる子が多かった。この点「ふたりのロッテ」は，両親の離婚，双生児という設定のため，子どもが自分と同一視するには無理があるのだろう，結末の幸福を喜びながらも一定の距離をおいてみているといえる。

6) 舞台と客席との距離では，１階前席，２階（グランドサークル），３階，１階後席の順に集中度がおち，否定的行動多くなっているが，有意差をみるほどではなかった。しかし，前席の子が「似ていない俳優二人が化粧や演技で双生児のようにみえる」というのに，３階席の子は「二人は双生児の姉妹が演じていると思った」といっている。また，前席の子は「俳優と目があった」といい，昨年度は「俳優の汗がとんできた」という子も多かった。舞台に近い席と遠い席では数字には表われないうけとめ方の違いがあるのは明らかである。

とにかく，本公演では劇場や舞台の広さと公演形式・内容が適切であったといえる。これは本公演が日本有数の完備された劇場と劇団によるからであり，一般の児童劇公演では，人形劇を設備の不備な広い会場で演ずるなど問題は多い。

7) 「ふたりのロッテ」の原作は子どもの世界名作のひとつでもあり，すでに原作に接している子も数名かぞえられた。しかし，「ロッテ」から野球チームやチューインガムの話と思って観劇にきた子もいる。また，プログラムのダブルキャストの意味がわからず，二人以上の俳優が交互に演じていると思いこんでいる子も多かった。観劇時に，劇場側から観劇マナーの指導があるが，学校側でも事前に子どもの観劇指導や公演内容への誘導が必要であろう。また，観劇後の話しあいによって経験を整理させることも必要であろう。体験の有無は劇の要素の理解や興味を高め，また観劇後の話しあいは観劇体験をさらに深めることになるからである。

× × ×

昨年度と今年度にわたり，小学６年生を対象として観客調査をおこなった。諸条件の整備された劇場で演じられる劇――一定のレベルに達した完成度の高い劇，しかも年齢対象を明確に設定して提供された上演で，子どもたちは生涯忘れない感動をえていることが確かめられた。子どもを感動させることは，人格形成のうえで大きな教育的価値をもっている。芸術の教育は人間性の教育でもあり，観劇もその一環としてとらえられるべきだと思う。日本の現状では，知識教育偏重のなかで創造性や想像力の教育が軽視され，児童向け劇団，劇場の貧困さは子どもに演劇教育や観劇の機会を与えることをこばんでいることを痛感させられた。

観劇反応の研究は，ここでひとまず終了するが，機会があれば観劇前後の指導とのかかわりを中心とした観劇反応の分析を試みたい。

最後に，長時間緊張を要する観察者として協力いただいた張湛華，清水玲子，大内規代，長島正子，平山誠，小林真理子の各氏，および繁雑な集計処理を分担していただいた田島恵子，鶴見節子氏に深く感謝する。なお，本研究は朝日生命厚生事業団の助成金をうけて実施されたものである。